

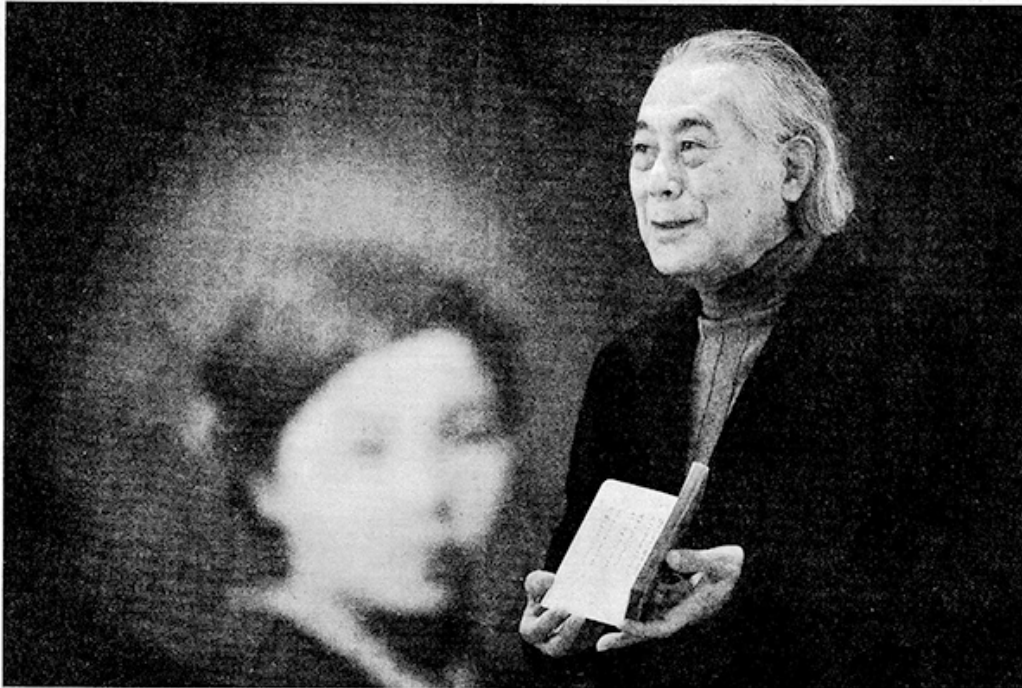
道あり

みすゞの詩 苦難に光

今年で没後90年となった山口県長門市出身の童謡詩人、金子みすゞ(1903〜30年)。26歳で世を去った「幻の詩人」を掘り起こしたのが、同市の金子みすゞ記念館長、矢崎節夫さん(73)だ。今も色あせることのないみすゞの作品に込められた思いを、困難あふれる現代社会に伝え続ける。

◇ 11月下旬、福島県いわき市で開かれた講演会で、みすゞの代表作「私と小鳥と鈴と」を取り上げた。詩題は「私」を最初に置くが、詩の後半では「鈴と、小鳥と、それから私」に変わる。「『私とあなた』では自己中心。『みんなちがって、みんないい』にはならない。みすゞさんの詩のまなざしは、『あなたと私』なのです」

活発な少年を詩の世界にいざなったのは母・はつさん。幼い頃からたくさんの童謡を歌ってくれ、小学校に入るとドイツの詩を教えてくれた。「他者の喜びや悲しみの中にも生きる」と



「みすゞさんと出会っていなければ、全く違う人生だったと思う」。遺稿がつづられた手帳のレプリカを手に、思いを語る矢崎さん(山口県長門市) 大野博昭撮影

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 ①



金子みすゞ記念館の竣工式であいさつする矢崎さん(中央)(2003年4月、本人提供)

ができる、最高の職業」。そんな母の言葉が、詩人を志すきっかけとなった。

早稲田大1年だった1966年、童謡集で出会ったみすゞの詩「大漁」が人生を変えた。

「朝焼小焼だ 大漁だ 大羽の 大漁だ。浜はまつりのようだけど 海のなかでは何万の 鰯のとむらい するだろう。V(金子みすゞ童謡全集

プロフィール

童謡詩人、童話作家。

1947年、東京生まれ。詩人の佐藤義美さん、まど・みちおさんに師事。82年に童謡集「ほしとそらのしたで」で赤い鳥文学賞を受賞。2003年、山口県長門市の金子みすゞ記念館の館長に就任した。1男1女の父で、現在は東京で妻と2人暮らし。

JULA出版局)

それまでに読んだ詩が全て吹き飛んだ。みすゞはイワシの立場からうたっていて、「ものの見方が一変した」。以来、古書店やゆかりの地を回り、みすゞの作品を探した。手がかりがつかめず、周囲から「もう無理だ」と言われても「思い続けるだけいい」と諦めなかった。

82年、遺稿512編が記された3冊の手帳を保管していた実弟を捜し当て、84年の全集発行につなげた。93年には「童謡詩人金子みすゞの生涯」を刊行。みすゞの一人娘、上村ふさえさん(94)(神奈川県海老名市)は「母とは3歳で死に別れ、私自身記憶がない。無名の詩人を広めようとした情熱はすくなく、ありがたかった」と言う。

東日本大震災が起きた2011年には、CMで流れた「こたまでしようか」が共感を広げ、傷付いた日本人の心々に寄り添った。

「みすゞさんは皆が抱える思いを言葉にした人。誰の心の中にもみすゞさんはいる」。必要としている人に、少しでもみすゞの詩を届けられたらと思う。(今回は計8回掲載の予定です)

*題字は書家の松清秀仙さん

道あり

東京都文京区で両親、8歳上の姉と4人で暮らしていた。小学校時代は休み時間と給食、体育の授業が待ち遠しい活発な子どもだった。

童謡や詩を最初に身近にしてくれたのは、母・はつさんだった。幼い頃からたたくさんの童謡を歌ってくれ、小学校に入ると海外の詩も聞かせてくれた。「文学少女だったのでしょう。男性だったら物書きか文学者になっていたのではないか」と矢崎さんは笑う。

小学4年生の時の担任だった橋見千恵子さん(86)(千葉県松戸市)からも、詩の魅力を学んだ。橋見さんは学級運営で詩の鑑賞指導を重視し、教室で有名な詩人の作品を紹介していた。

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 ②

童謡や詩いつもそばに

休み時間になるといつも橋見さんの背中に飛び乗り、はしゃいでいた。

ある日、橋見さんの耳に綿が詰まっているのに気づいた。同級生から自分の大声で鼓膜が傷つき、病院に通っていると教え

られた。心が痛んだが、「ごめんなさい」と言えなかった。「先生が好きな詩を好きになることが、せめてもの罪滅ぼしだ」と考えた。

当時から高村光太郎の「ぼろぼろな駝鳥」や宮沢賢治の「雨

と書くことには全力投球する子どもだった。詩を誰よりも早く覚え、皆の前で進んで暗唱していた」と橋見さんは振り返る。

やがて、自分で詩を書きたいと思うようになった。母に詩集をねだると、子ども向けの詩集を買いに行く前に、自宅にあった北原白秋らの詩集を目の前に並べてくれた。

「詩人は自分の喜びや悲しみに佇むだけでなく、人の喜びや悲しみにも佇む。最高の職業ですよ」。母の言葉が童心にすーっとしみた。

その後、図書館で手に取った本に載っていた詩人、佐藤義美さん(大分県竹田市出身)の童謡「月の中」にひかれ、「弟子になりたい」と思った。「最高の職業」へ、歩む道が定まった。



小学校時代の恩師・橋見さん(奥)と矢崎さん(最後列中央)＝本人提供

ニモマケズ」

などに強くひかれていた。

「『これは』

道あり

小学4年から詩作を始めたが、詩人の作風をまねたものにはすぎなかった。担任の橋見千恵子さん(86)(千葉県松戸市)からコンクールに誘われても、出品されるのは詩ではなく作文だった。

中学、高校は陸上部に所属。その間も中原中也や萩原朔太郎らの作品に親しんだ。幼い頃、母に歌ってもらった童謡を書き始めた。西條八十、北原白秋、野口雨情という3大童謡詩人を生んだ早稲田大を目指した。

1966年、早大の第二文学部(当時)に合格。その年、電車で通学中に読んだ1冊の童謡集が、人生を変えた。

童謡集に1編だけ載っていた金子みすゞの詩「大漁」。人間

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 ③

人生を変えた1編の詩

ん(73)(相模

原市)は、文学への熱意に驚いたことを

本位でなく、命を取られた魚の側の悲しみを表現した10行に、「こんな世界が描けるのか」と

衝撃を受けた。「きつと本人の作品だけの童謡集があるはずだ」。1週間ほど授業にも出ずに古書店などを探し回ったが、見つからなかった。思えばこの時から「みすゞさがし」が始まった。

著名な詩人たちに少しでも近づきたくて、社会人らが集まる童謡の会に参加しては作品を書いた。やがてその会で知り合った編集者から「物書きを目指すなら」と、作家の原稿取りのアルバイトを紹介され、夏休みや冬休みに働いた。

中学時代からの親友で米文学を専門とした玉川大名誉教授、今井夏彦さん

待ち合わせは東京・新橋の喫茶店。渡された大正・昭和初期の名作を集めた童謡集の解説原稿にくぎ付けになった。「つゆ金子みすゞ」。彼女の2編目の作品に、期せずしてたどり着いた。(4回目は8日に掲載予定です)



早稲田大の学生の頃の矢崎さん(前列左端、本人提供)

道あり

「この金子みすゞって、あの『大漁』の金子みすゞですか。この人をさがしていたんです」

早稲田大3年の1968年8月、出版社の原稿取りのアルバイトで憧れの詩人であり、童謡でも知られる佐藤義美さんと会った。渡された原稿は童謡集の解説文。そこには「つゆ 金子みすゞ」と書かれていた。

童謡集は曲がついた作品だけ載せるものだった。佐藤さんは「彼女は僕たちの憧れの的だった。『露』は知人に無理を言っ

て作曲してもらった」。みすゞが山口県下関市から作品を雑誌に投稿していたこと、未発表の遺稿集が3冊あることなどを教えてくれた。

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 ④

第32回「佐藤義美賞」竹田童謡作詩コンクール



「佐藤義美賞」竹田童謡作詩コンクール表彰式で講評を述べる矢崎さん（11月3日、大分県竹田市教育委員会提供）

師が残してくれた出会い

で終わった。
ただ、佐藤さんは熱心な青年が詩を学

持参した自作の童謡を見せた。「先生と呼んでいいですか」

と聞くと、佐藤さんは「いいよ」と応じ、神奈川県逗子市の自宅に誘ってくれた。

当時、佐藤さんは病で死期が迫っていた。連絡できずにいると、遊びに来るよう佐藤さんの方から出版社に電話があった。

逗子では「海岸に行ったら、はだしで駆けたくなるよ

うでなければ童謡は書けない」と創作の心構えを説かれた。その後、東京でも見てもらったが、佐藤さんは12月に亡くなり、師弟関係は4か月

で続けたための「人間関係」を残してくれた。まな弟子の児童文学者が山口県周南市出身の詩人、まど・みちおさんを紹介。以来、まどさんを半世紀以上師と仰ぐ。

「佐藤先生と過ごした4か月がなかったら、まど先生の弟子になることも、みすゞさんの作品をよみがえらせることもなかった」

佐藤さんの出身地の大分県竹田市では「『佐藤義美賞』竹田童謡作詩コンクール」が続いており、毎年審査員長として携わっている。顕彰団体「竹田よしみ会」の高橋功さん(79)は

「佐藤先生と会った人は、今やほとんどいない。竹田としては矢崎先生が一番の頼り」と感謝する。

道あり

早稲田大4年になると、アルバイト先の幼児雑誌の編集長から「卒業したらうちに来ないか」と声をかけられた。ありがたかったが、「作家のところは原稿を取りに行くのではなく、取りに来てもらう仕事がしたい」と、童謡詩人への夢を追い続けることにした。

1970年に卒業すると、編集長が童謡の原稿を依頼してくれた。71年1月号に掲載された「かぜひき」がデビュー作。挿絵は「アンパンマン」のやなせたかしさんが描いてくれた。熊本市出身の妻、真弓さん(74)と出会ったのはその頃だ。懇意の児童文学者宅を訪れた時、出版社の編集者として原稿を取りに来ていたのが真弓さん

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 5

童謡デビュー順調に活動

だった。ありのままの自分を受け入れてくれる真弓さんとの結婚を意識するまでに、時間はかからなかった。

73年に結婚。もう1人の師、詩人のまど・みちおさんが仲人を務めてくれた。幼い頃に童謡や詩の世界に導いてくれた母、はつさん、父、次男さんを相次いで亡くした頃で、真弓さんの

存在は大切な心の支えだった。「定期収入はないのに、一度もお金のことを言われたことはなかった」と今でも感謝しきりだ。

童謡も書き、75年には「二十七八人目のほこ」で第4回児童文芸新人賞を受賞。81年、19歳から書きためた31編を収めた最初の童謡集「ぼくがいけないとき」を出版した。美術大学出身の真

を務めた経験がある縁で、浜田さんが挿絵を引き受けてくれた。

自らの創作活動は軌道に乗り始めていた。だが、大学生の時に衝撃を受けた金子みすゞには近づけていなかった。「みすゞさがし」は大きな成果がないまま10年以上が過ぎ、先輩詩人から「もう無理だよ」とも言われた。だが「好きなのだから思い続けたい」と諦めなかった。ある時、童謡仲間からみすゞの作品30編を集めた私家版の冊子があると聞いた。同時代の投稿詩人が作ったものだった。冊子にはみすゞが山口県下関市にあった「商品館」から投稿していたことなどが書かれていた。みすゞさがしに光が差した。(6回目は15日に掲載予定です)



童謡集「ほしとそらのしたで」で赤い鳥文学賞を受けた矢崎さん(中央)と、授賞式に駆けつけたまど・みちおさん(右)(1982年、本人提供)

弓さんが日本を代表する版画家、浜田知明さんの助手

道あり

金子みすゞの足跡をたどろうと、1980年から山口県下関市を訪ねるようになった。同市の梅光女学院短大・大学(現・梅光学院大)で教鞭を執っていた中学校以来の友人、今井夏彦さん(73)(神奈川県相模原市)の結婚式に出席したのがきっかけ。以降、年に1、2回通った。ところが、今井さんや地元の人に協力してもらっても、なかなか「みすゞ」について分からなかった。そこで、みすゞが商店が集まった施設「商品館」から投稿していたということを手がかりに動き始めた。

82年5月末、今井さんに「大正時代から続いている書店を見つけてみすゞさんについて聞いてほしい」と依頼した。6月4

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 ⑥

みすゞ遺稿 ついに発見

上山さんと
東京で会い、
みすゞの51
2編の遺稿が

日、ついにその時がきた。今井さんが訪ねてくれていた数軒のうち1軒で、「自分はいとこだ」と話す人物に出会った。みすゞは商品館内の書店で働いていた。吉報はすぐに知らされた。童話集「ほしとそらのしたで」で第12回赤い鳥文学賞を受けたとの連絡を3日前に受けたばか

りだったが、受賞の喜びが吹き飛ばすほどうれしかった。連絡先に電話をすると、みすゞの本名はテル、実弟は東京で活躍する劇作家の上山雅輔さんだとわかった。「大漁」の詩に衝撃を受けてから16年。「ずっと人に助けられてきた。本当に人に恵まれてきた」と感謝する。

記された3冊の手帳を託された。8割以上が未発表。傷むのが怖くて触れられずにいたが、上山さんの勧めでコピーして一晩で3度読んだ。みすゞのまなざしは、師事した詩人、まどみちおさんと同じだと感じた。例えば、まどさんの代表作「ぞうさん」。悪口かもしれない「おはながながいのね」との問いかけを、「そうよ かあさんもながいのよ」と喜びの言葉で受け止めた。「象は象だから素晴らしい、みんな違うから素晴らしい。みすゞさんの『みんな違って、みんないい』も同じだ」。遺稿を通じて、改めて奥深さに気付いた。

「自分だけのものにしてはいけない。絶対に全集を出そう」。さらなる奔走が始まった。



金子みすゞの遺稿手帳のレプリカを手にする矢崎さん(11月6日、山口県長門市で)＝大野博昭撮影

道あり

さがし求めていた童謡詩人、金子みすゞにたどり着いたのは1982年。実弟の上山雅輔さんから、保管していた遺稿512編が記された3冊の手帳を託された。全集の出版に向けて遺稿のコピーを手に出版社を回ったが、「童謡は売れない」と反応は芳しくなかった。

例外が1人いた。JULA出版局(東京)元代表の大村祐子さん(78)(東京都文京区)だ。大村さんは「本当に心を打つ作品がいくつもあった。手帳がなくなれば作品も失われる。活字として残せば、50年の間に必ず評価する人が出てくるはずだ」と確信した。

83年、大村さんから予約を取った上で刊行することを提案さ

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 7

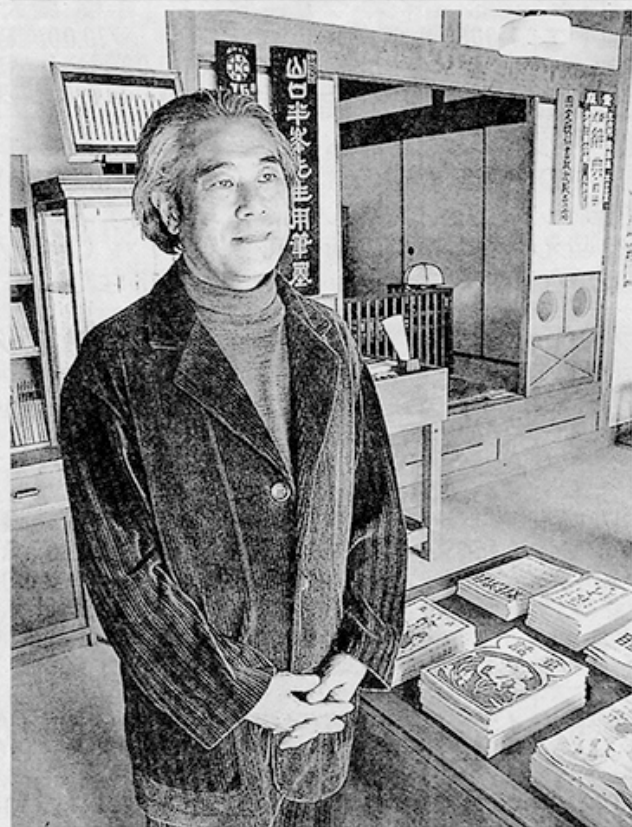
全集刊行人々の心打つ

2000回を超えた。

2003年、長門市に金子み

された。遺稿発見をきっかけに、みすゞゆかりの山口県長門、下関両市では、顕彰団体ができて予約集めにも協力してくれた。全集刊行が決まって新聞で報道されると、出版局の電話が鳴りやまないほど申し込みが殺到。300部の予定が1000部に

増え、84年に全集が刊行された。全集をきっかけにみすゞの詩は広く知られるようになった。国語の教科書にも登場し、世代を超えて人々の心に刻み込まれていった。自身も頼まれた講演には可能な限り応じ、みすゞについて語り続けた。その回数は



開館した金子みすゞ記念館の館長に就任した当時の矢崎さん(2003年、山口県長門市で)

すゞ記念館が開館し、館長に就任。詩は10か国語以上に翻訳された。金子みすゞ顕彰会事務局長の草場睦弘さん(78)は「館長はみすゞさんの詩を人々に手渡すように広げてきた」と語る。16年にわたった「みすゞさがし」を「そんなに長く……」と言う人もいる。だが、自身は「16年しか」だと思っている。師事した詩人、佐藤義美さんらからもっと長い期間、彼女を伝えてきたからこそ、遺稿にたどり着けたと考えている。

妻の真弓さん(74)から「家族と仕事とみすゞさんはずっと飽きないね」と言われたことがある。「その三つに関わっている時が、一番、素直な自分であるからね」。みすゞと出会えて幸せだったと思う。

道あり

「生活は大丈夫？」

金子みすゞに光をあてることに熱中する自分を、師匠のまど・みちおさんは心配していた。みすゞのことである人から「矢崎さんはいい仕事をしましたね」と言われたまどさんが、こう返したとも聞いた。「でも、自分の作品を書かないと」。その言葉にせかされるように、2013年に2冊目の童謡集「うずまきさんが」を発売した。自らの作品をまとめたのは32年ぶりだった。

交流のある詩人、武鹿悦子さん(91)(奈良県三郷町)が冒頭に一文を寄せてくれた。「彼は、みすゞ童謡に心酔し、自己の創作欲をおさえて、社会へ向け、童謡史へ向け、みすゞ伝達の努

金子みすゞ記念館長 矢崎 節夫さん 73 8

自分の童謡へ一歩ずつ

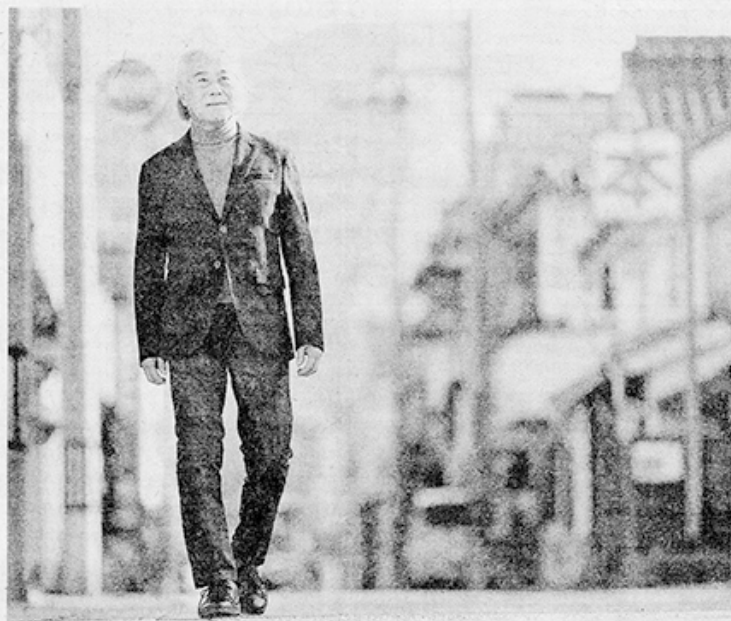
力をおしみませんでした」。心を注いできた自らの姿勢を評価してくれました。

一方で、1984年の全集発

刊から時がたち、心の持ちようが少しずつ変化してきた。「どれだけ書いてもみすゞさんの作品には及ばない。みすゞさんを伝えていく方が大事

あしたの ぼくに あえるんだ」(「あしたの ぼく」 矢崎節夫童謡集「うずまきさんが」JULA出版局より)

あるけない
それでも
いちに あ
るいていくと



金子みすゞの故郷・仙崎地区中心部を歩く矢崎さん(山口県長門市) 大野博昭撮影

だ」と考え、みすゞを掘り起こす仕事を優先させてきたが、「僕は僕でありたい」と思うようにもなってきた。その気持ちは、童謡集に収めた作品に表現されている。

2015年には3冊目の童謡集「きらり きーん」を出した。小学生の頃から物書きになったのだから、「みすゞさんをよみがえらせた人」では終われない。自分の童謡を書くため、これからも前へ進む。

(杉尾毅が担当しました)

次回は来年1月中旬から掲載する予定です。

(1番略)へい
ち に いち に
どんなに おお
またで あるいて
も あしの ゆび
一センチさきは

「道あり」へのご意見をお寄せください。宛先は社会部(s-syakai@yomiuri.co.jp)、ファックスは0662・715・5509。